「いじめ」の心理について
（前編）

内田安久

この一月、またしてもいじめによる中二女の自殺である。しかも六年ほど前の中一男のばあいと同じように、ノートや教科書に死ねと楽書きされていたという。友だちの軽い悪戯心からの文字だったのであろうが、いかに本人にとって鋭い呪いの言葉として胸に突き刺さったことだったのであろう。

なぜ、このようなことが最近続発するのか。いろいろ論議はされている。しかしそれらの原因を簡単に、学校とか家庭とか社会とかの特定なものにしぼって、その責任を追求しようとするのは、あまりにも短絡に過ぎる考え方だと思う。表面的なことを取りあげるのも、さることながら、もっと奥底を流れる根本的なところに何があるかと、十分に探究してみることが肝要なのではあるまいか。

自殺に関しての、五歳以下の幼児には統計上に数字が見当らないとのこと（児童精神医学の高木俊郎博士著「児童精神科のお話」合同出版）なので、ここでは触れないが、いじめの問題は幼児にもあることを忘れてはなるまい。幼児の心理や行動は、割合に単純明瞭であるから、まずそれを手がかりに、いじめの心理の底流をまさぐっていけば、ある程度その深層にひそむ原因らしい或るものを、察知する端緒がえられるのではないかしら。そういう視点から、現在のいじめの心理の一面を検討していってみたいというのが、本稿のねらいなのである。

いじめは、今はじまったことではない。昔からあったのだが、ただ現今のように特殊な異常現象として、世間がとりあげて大騒ぎをしないでいただけのことである。

では、なにゆえ現在このような社会問題となったのか、それには一応従来のいじめとの比較をしてみる必要があると思う。

従来のいじめの性質を分析すると、だいたい次のような点が挙げられるようである。

①総じて制裁的色彩が濃いかった。不正をはたらいた、名誉を汚した、上級者に対する態度がよくない、お洒落でキザで生意気だ、というような理由づけで、けっ

たり殴ったりしたものだった。なかには、かつて上級者からやられたから、今度は自分が下級者に向って「カッを入れてやる番だ」などという報復的な義理堅いものもあったが、案外たわいもないサラッとしたものだったと云える。

②加害者は、たいていは特定の少数者で、多くは不良性を帯びた者だった。ときには、部活動や級代表者というようなものもあるが、一般にはいじめのあったことさえ知らないというような状態が普通なのであった。

③被害者も、それなりの特定者であることが多く、なんらかの点で加害者との関わりのあるのが多かったようである。そこには、一面擬装的ながらも仁義的ふんいきが感じられないでもなかった。

④腕力を用いる暴力が主で、むら八分的ないじめもあるにはあったが、現在のような陰湿なものはあまりみかけられなかったようである。

以上のような従来のいじめに対し、現今のいじめの特徴は、一般に次のようなものがあると云えよう。

①単なる弱い者いじめの感が深い。確たる理由はなく、ただ身体が小さい、弱々しい、動作が鈍い、親がいない、服装が貧しい、内気者だ、泣き虫だ、などというだけのことでいじめの対象とされる。一種の気運的うごきが強いので、傍からはそれとつかみにくいうらみがある。

②加害者は、かならずしもこれと決まった少数者とは限らず、ごく普通の目だたない人物でも、いじめっ子となるケースが多い。また加害者が単独なばあいも少ない。不特定多数者なのである。付和雷同的に集団化して動き、直接自分では手を出さないが心情的には加害者の立場にたって傍観している、という者が多いのだと云う。いつ自分が被害者になるかもしれぬという不安な気持ちをいだきながら、仕方なくそうしているという者も相当あるのだとも聞く。それが民主主義・平和主義の一面の姿なのであろうか。

③被害者は、特定の少数者か、あるいは孤独なひとり

者のばあいが多い。それを周囲で見まもっている者は少なくないが、かばったり救助したりしてくれる友だちは稀れだという。先生に告げても真剣にとりあげてはもらえず、親には心配かけまいとして黙って我慢するよりほかなく、結局それが登校拒否や自殺にまでもつながることになる。こうした傾向があまりにも多い。

④いじめの方法が陰湿であり、そのうえ残忍性を帯びた傾向さえみられる。入れかわり立ちかわり執拗ないやがらせ、履きものをかくしたり、教科書を汚ごしたり、ノートに楽書きしたり、給食に邪魔をしたり、聞こえよがしの悪口をいったり、そうしたいじめは従来にだって無いわけでもなかったが、さらに集団的に裾めくりとか、裸祭りとか、ついには、煙草火の押しつけや、もっとひどいのはやくざまがいのリンチなどがある。こうなると、これが学校教育を受けているもののやることかと驚きあきれるより他はない。

どうして、このようないじめの生態がかもし出されるようになったのであろうか、と云うことを検討する前に、静かに本来のいじめなるものの構造について考えてみることも必要であろう。ひと口にいじめと云うが、それを遂行する心理状態には、いろいろニューアンスのちがったものがあるはずである。時によって、それら自身が変化したり、または混合したりして、複雑多様なものもなる。そうかと思うと、きわめて単純明快のばあいもあって、一様には扱かいかねるのだが、一応それらを分析してみると、おおよそ次のような分類ができるのではないかと考えられる。

①遊びからくるいじめである。――戯むれあううちに、いつしかエスカレートしてきて感情がたかぶり、やがては一方が他方をしめつけ、いためつけるようになってしまう。笑い楽しんでいるうちに、それが自然にいじめの相となる、悪意のないいじめとでも云うべきもので、馴れあいの過剰からとか、興奮感情の爆発からとかいうばあいに多い。幼児の遊びのなかなどで、よく見られる現象であるが、車内の小中高生にも時どき見かけら

れる。

②からかいからのいじめである。――他意ないが、相手の反応をみて、自分のあり方を試めしてみようとする心の動きがみえる。多くは自分が優位にあるばあいであって、相手が間誤ついたり、イライラしたり、降参したりするのが面白い。したがって、特に相手が抵抗するように仕向けて、いやがうえにも自己満足をえようとする。軽いからかいのうちは、相手が迷惑がる程度のいじめといえるが、これが執拗にからむとなると、なぶると呼ばれる深刻なものとなってしまう。からかっても相手に反応がないと、いじめの効果があがらない欲求不満から、さらにその行動は激化する傾向を示すことがある。

③やっかみからのいじめである。――成績がよいとか、人気があるとか、美人だとか、お洒落だとか、とにかく自分に劣等感や競争意識をかりたてるような相手に対して、いやがらせをして、やっつけようとするもので、これは、ねたみ・そねみからくるだけに、とかく陰湿度が高くなりやすい。女性の嫉妬からのいじめの凄まじさを想像するがよい。それがさらに、怨みつらみと云うことにでもなれば、そのいじめは単なるいじめの範囲から逸脱して、本格的の拷問・虐待ということにまでもなるおそれがある。

さて、以上のようないじめの様態を、幼児のばあいに当てはめてみると、どうなるか。

いうまでもなく、幼児の生活はほとんど遊びで終始する、と云えよう。そして、その遊びのなかで、社会生活への適応への手ほどきを体験し、もちろん人間関係についての学習をする。だから幼児にみられるいじめの性質は、当然前記の①を基盤とするものであることが了承される。しかし②のケースも少なくはない。相手の玩具をとりあげたり、造ったものを傍から壊したり、相手を突いたり倒したり、つまりは相手をからかう意味でのいじめとなる。こうした行動は、ある意味では相手欲しさの表現とみられる節もある。

ところが、特に注目すべきは③に属するケースのばあいであろう。幼児は単純未熟であるだけに、その表現も

率直である。動作も激しく、コントロールがきかない。これはと思うと、徹底的にいじめにかかる。幼児だからたいしたことはあるまい、と油断するとあぶない。限界の判別がつかないので、どのようなことでも平気で断行する。かつて、二歳ぐらいの幼児が、生まれて間もない赤ちゃんを、刃物で切り刻んで遊んでいた、という事件のあったことを思い出す。自分のお母さんを奪った邪魔者と思ってのことだったのであろうとの想像はつく。だが問題なのはその残忍性である。これは恐らくは、昆虫の羽や手足をもぎとって、動けなくなった変化をみて喜ぶ無邪気な遊び心と同じようなものがあったのではあるまいか、と推定すれば、これをいきなり残忍性と云ってのけてしまうのは、いかがなものであろうか。幼児は物を投げたり壊わしたりして喜ぶ。それは自分の行為によって何かの変化をおこすことができたという一種の自己意識の開眼であると解釈することができるとすれば、これを叱ってその行動を禁止するのは、自我の成長を阻止するものとして、さし控えた方がよいとも考えられる。

けれどもまた他面では、叱られるという障壁にぶつかったことで、自分の行動範囲にも限界線のあることが分かり、自分というものがそれだけ明確に意識されることになる。それが修練による自我の確立への道程にもなるので、この経験を欠くところに甘えが生じ、ひいては人格形成の不毛が生ずることともなる恐れがあるとも云えよう。

では、こうした様態ある幼児のいじめが、その延長の現在の若者の間にみられるいじめと、果してどのような関連性があると考えられるか、またその関連性が現在の幼児教育の面に反照されるばあい、幼児の遊び即ち生活の場においての対応は、どのようにするのが望ましいか、これらについて考察することは無意義ではないと信ずるのである。

（つづく）

（元お茶の水女子大教授）